



貓

富士川義之

編訳

語

物



猫物語

富士川義之

白水社

猫物語

一九九二年三月一〇日印刷
一九九二年三月三〇日発行

編者 © 富士川義之

発行者 藤原一晃

印刷所 東洋経済印刷

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部(三三)七八一一
編集部(三三)七八二一

振替東京九一三三二八
郵便番号 一〇一

黒岩製本

ISBN 4-560-04287-X

Printed in Japan

猫物語*目次



モスクワの魔女と黒猫『アントーニイ・ボゴレーリスキイ』栗原成郎訳

5

ねこ『アントン・ド・チュエーホフ』池田健太郎訳

44

ブルーレマンの家『テオドル・シュトルム』藤川芳朗訳

50

キプロスの猫『ドロシー・L・セイヤーズ』海老根宏訳

78

猫の王様『ステイヴン・ヴィンセント・ベネ』中矢一義訳

98

猫との会話『ヒレア・ペロック』富士川義之訳

125

聖なる猫の家庭生活『アーサー・ワイゴール』富士川義之訳

131

スプーナー「エリナー・フアージョン」篠田綾子訳

143

《ぶるっ》「シドニー・ガブリエル・コレット」山崎剛太郎訳

162

牡猫^{ルマトゥ}「シドニー・ガブリエル・コレット」山崎剛太郎訳

168

死ぬことのない雌猫「カレル・チャペック」千野栄一訳

173

ポドロ「レスリー・P・ハートリー」高橋和久訳

179

がんこなネつたちのいる庭「イターロ・カルヴィーノ」安藤美紀夫訳

197

著者紹介

217

編者あとがき

221

◆菱幘

伊勢功治

◆カバ・イラスト

土橋とし子



モスクワの魔女と黒猫 アントーニイ・ボゴレーリスキイ〔ロシア〕

モスクワの大火（一八一二年、ナポレオンの部のウラジミール街道に出るところに設けられた関所）の近くに、正面に五つの小窓をつけ、その中央の窓の上部が明かりの間になっている、小ぢんまりとした木造の家が建っていた。朽ちかけた板塀に囲まれた小さな中庭のなかほどに井戸があるのが見えた。庭の両隅には今にも崩れ落ちそうな納屋が建っていて、そのうちの一つは数羽の七面鳥と鶏の小屋に使われており、七面鳥と鶏は納屋を横切るように渡してある支えの止まり木を仲良く共有していた。家屋の前の中には低い矢来（やらい）の陰からなかなかまどの木が二、三本背伸びをして立っていて、足元に生えている黒すぐりと木苺（もいちじ）の茂みを軽蔑（けいべつ）のまなこで見下しているかのように見えた。玄関の上がり口の階段のすぐそばには食料品を貯蔵するための小さな地下の室（むろ）が掘（ほ）ってあった。

この見すばらしい小さな家に退職した郵便配達人のオノーフリッチが妻のイヴァーノヴナと娘のマーシャと一緒に引越してくることになった。オノーフリッチはまだ若かったころ二十年ほど軍隊勤めをして兵長まで昇進したが、その後はモスクワ中央郵便局に勤め、同じく二十年ほど誠心誠意職務に励んだ。罰を受けたことは一度もなく、少なくとも大過なく勤め上げて、このたびめでたく退官、年金生活の身となった。その家は、最近物故した高齢の叔母の遺産を相続したもので、彼の持家であった。その老婆は生前「ラフェルトヴォの罌粟の実菓子売り」の名でラフェルトヴォ区（一八世紀末から一八世紀前半にかけて設けられていたモスクワ市の行政区で、市の東部、ヤウザ川左岸に位置していた。ラフェルトヴォは俗称で、正しくはレフオルトヴォ。ピョートル一世に仕えた將軍レフオルト（一六五八—一六九九）の邸があつたことから名付けられた）一帯では有名な婦人だった。と言うのは、彼女は腕に縊りをかけて焼いた蜂密入りの罌粟の実の焼菓子クツキを売るところを生業なりわいとしていたからである。毎日、天氣が良くても悪くても、老婆は朝早く罌粟の実菓子をいっぱい詰めた籠を頭の上に載せて家を出て、プロロム関所のほうに向うのだった。関所に着くと、彼女は清潔なタオルを敷き上げ、その上に籠をぶちまけて、罌粟の実菓子を整然と並べるのだった。そのようにして、彼女は、自分の商品を買ってもらおうと誰かに声をかけるでもなく、黙りこくったまま店番をしながら夕刻まで座っていた。夕闇が迫りはじめると、老婆はそそくさと焼菓子を籠に集めて、小股で家路に向うのだった。警備に当たる衛兵たちはこのおばあさんが好きだった。ときどき無料で甘い罌粟の実菓子を振る舞ってくれることがあつたからだ。

しかし老婆のこの生業は、彼女のまったく別の職業を覆い隠す仮面にすぎなかった。夜が更けて、ほかの街では街灯がともりはじめ、一方、老婆の家の近傍一帯には夜の闇がたちこめるころ、さまざま

まな身分や境遇の人々がおずおずとそのあばらやに近づき、そつと木戸をたたく。鎖に繋がれた大きな犬のスルタンが大きな吠え声で見知らぬ人物の来訪を告げる。老婆が戸を開き、長い骨ばった指で訪問者の手を取り、軒の低い家の中へと案内する。家の中にはちらちらするランプの灯りのもと、がたがたの檜の机の上に一組のランプ札が置いてある。ランプ札は使いすぎのためにグイヤとハートの区別が辛うじてつくほどの代物である。暖炉に接続した寝板の上には赤銅製のコーヒ―沸しが置いてあり、壁には篩ふるいが懸けてある。老婆はあらかじめ客から自由な施しをもらつたうえで状況を判断して、ランプ占いに取り掛かるか、あるいはコーヒ―占にするか、篩占にするかを決める。老婆の雄弁な口から未来の幸福についての予言が川のように流れ出る——そして甘い希望に陶醉した来訪者たちが、老婆の家を出る際に、入った時よりも二倍も多いお札を出すことも稀ではなかった。

このようにして、老婆の生活はこの二つの平和な仕事に携わりながら平穩無事に過ぎていった。妬みぶかい近所の人々は彼女のことを陰では魔法使だとか魔女だとか呼んでいたが、そのくせ面と向かつては彼女に深々とお辞儀をし、愛想笑いを浮かべて「おばあちゃん」と呼んでいた。老婆に対するそのような敬意が生じたのは、幾分か次の事情によるところがある。——ある時、隣人の一人が「ラフェルトヴォの罌粟の実菓子売り」が禁制のランプ占いやコーヒ―占いに携わり、あまつさえ怪しげな人々と交際しているらしいことを警察に密告しようと思ひ立った。しかし翌日警官がやつて来て家の中に立ち入り、ながながと嚴格に家宅搜索を行なったが、なにも異常は発見できなかった、と引き揚げるに際して公言した。この畏敬すべき老婆が自分の無実の証しにどんな手段を講じたかは

知る由もない。それに、そんなことはどうでもよいことだ。密告が根も葉もないことであつたと分かつただけで十分である。運勢そのものが哀れな罌粟の実菓子売りに味方したものと思われた。なぜなら、それからまもなく密告者の息子であるやんちゃん男の児が庭を走っていた時に大釘に躓いて倒れ、片目を失う羽目になつたからである。それにつづいてその人の女房がちよつとしたはずみで滑つて転び、足を捻挫した。災難の拳句の果てに、彼の家の一番良い牝牛が、それまでは病氣もしたことがなかつたのに、突然死んでしまつた。絶望した隣人は涙と贈物とをもつてやつとのことで老婆のご機嫌を取り結ぶことができた。それからというものは近隣の人々はみな老婆に一目を置くようになった。誰はばかりことなく、罌粟の実菓子売りは魔女である、と大きな声で言えたのは、住まいを替えて、ラフェルトヴォから遠い地区——例えば、プレスネンスキイ池、ハモーフニキ、ピヤートニツカヤなど——に引つ越した人々だけであつた。そういう人々は、暗い夜に真つ赤に焼けた炭火のような目をした大鴉が老婆の家の屋根に飛んできたのをこの目で見た、と請け合つた。なかには、毎朝老婆を門のところまで送り、晩には出迎える彼女のお氣に入りの黒猫はまさに悪魔にほかならない、と誓つて言う人々さえいた。

こういった噂は、職務上の特権で多くの家々の玄関口に自由に出入りのできたオヌーフリツチの耳について届くこととなつた。オヌーフリツチは信心深い人間だったので、自分の血のつながつた叔母が悪霊たちと通じ合つていふと思つと、心が千々に乱れた。どうしたらよいか、彼はなかなか決心がつかなかつた。

「イヴァーノヴナ!」——ある晩、寢床にもぐりこむ時について彼は妻に言った——「イヴァーノヴナ、事は決まったぞ! あしたの朝わたしは叔母の家に行き、呪わしい仕事を止めるように説得してみようと思う。叔母も、ありがたいことに、もう八十の坂を越えている。こんなに長生きしたんだから、罪滅ばしをすべき歳なのだ。自分の魂の救いのことを考えるべき時なのだ」

オヌーフリツチのこの考えは彼の妻にはまったく気に入らなかった。ラフェルトヴォの罌粟の実菓子売りはみんなから金持と思われていたし、オヌーフリツチは彼女の唯一の相続人だったからだ。

「ねえ、あなた」——妻は夫の皺の寄った額をそっと撫でながら言った——「お願いですから、他人の事に口出しはしないでくださいな。うちじやあ自分たちの心配事だけで十分なんですから。マーシャももう子供じゃないし、いずれはお嫁に出さなければならぬ時がきます。それなのに持参金もない娘をもらってくれるお婿さんをどうやって捜すんですか。あなたの叔母さまがうちの娘を可愛がつてくださることはご存知の事です。叔母さまはマーシャの代母なんですから、いざ婚礼ということになれば、おねだりのできる人は叔母さま以外に誰もいないじやありませんか。だから、マーシャを不憫に思うのでしたら、あの娘を少しでも愛しているのですしたら、おばあちゃんをそっとしておいてあげなさいよ。あの娘にしたところで……」

イヴァーノヴナは話をつづけようとしたが、気がつく、オヌーフリツチは^{いげき}軒をかいていた。彼女は、以前にはこんなに冷淡に自分の話を聞き流すような人ではなかったことを想い起こし、悲しげに

夫の顔を見て、それから反対側に寝返り、まもなく自分も寢息を立てはじめた。

翌朝、イヴァーノヴナがまだ深い眠りの抱擁のうちに安らいでいるうちに、オヌーフリツチはそつとベッドから起き上がり、奇蹟の聖者ニコライの聖像「イコノスタシヤ」に向つて敬虔な祈りをささげてから、制帽に輝く双頭の鷲と郵便配達人の記章をラシャ布で拭い、制服を着た。それから薬草入りのウオツカを一杯飲んで気合いを入れ、玄関の入口※の間に出了た。そこでどしりとしたサーベルを腰に帯び、もう一度十字を切つて、プロローム関所に向つた。

老婆は愛想よく彼を迎えた。

「おやおや、誰かと思へば、わたしの甥っ子じゃないか」——叔母は甥に言つた——「いったい、どういふ風の吹き回しでこんな朝早く家をとび出して、こんな遠くまでやつて来たのかね。まあまあ、とにかくよく来てくれたね、お座りよ」

オヌーフリツチは叔母と並んで長椅子に腰をおろし、咳払いをしたが、どのように話を切り出したらいよいよ分からなかつた。この時よばよばの老婆が彼には以前よりも恐ろしげに見えた。それは三十年ばかり昔のトルコ軍の砲台よりも彼には恐ろしかった。ついに彼は急に腹が据わつた。

「叔母さん！」——彼は重々しい声で切り出した——「きょうは大事な用件で話をしに来ました」
「なんだね、言つてごらん。聞いてあげるよ」と老婆は答えた。

「叔母さん！ 叔母さんもうこの世ではそうながくは生きられないでしょう。罪滅ばしをすべき時です。悪魔と縁を切り、悪魔の惑わしを絶つべき時ではないですか」

老婆は彼にそれ以上話をつづけさせなかった。彼女の唇は青くなり、目は血走り、鼻の尖端が音を立てて顎を打ちはじめた。

「わたしの家から出て行け！」——彼女は憎悪のあまり息も切れ切れにわめいた——「失せろ、罰当たりめが！二度とうちの敷居が跨げないようにお前の脚なんぞひん曲がつてしまえ！」

老婆は枯木のような腕を振り上げた……。オヌーフリツチは腰を抜かさんばかりにびっくり仰天した。久しく失っていた往年の筋肉のしなやかさが彼の脚ににわかに戻った。彼は表階段を一気に跳び降り、一目散に家にとんで帰った。

その時以来、老婆とオヌーフリツチの家族とのいっさいの關係が途絶した。そのようにして数年の歲月が過ぎた。マーシャは花の盛りになり、五月の昼の日のように美しかった。若者たちはマーシャの後を追ひ回し、老人たちは彼女に見惚れて、過ぎ去った自分の青春を惜しんだ。しかしマーシャは貧しかったので求婚者は現れなかった。イヴァーノヴナは高齢の叔母のことをますます頻繁に想い起こすようになり、どうしても心が落ち着かなかった。

「お父さんはあの時頭がおかしくなっていたんだよ。なんだって自分が頼まれてもない問題に口を出さなければならなかったのかねえ？ おかげでお前はお嫁に行けない羽目になってしまったよ！」と彼女はマーシャによく愚痴をこぼした。

イヴァーノヴナがまだ若くて綺麗だった三十年ほど前のことだったら、彼女はオヌーフリツチに叔母に対して詫びを入れさせて、叔母と和解するよう、彼を説得することを諦めるようなことはしなか

ったであろう。しかしイヴァーノヴナの頬の薔薇色が皺にその席を譲るようになった頃から、オヌーフリツチは、夫は妻の頭であることを思い出し、哀れなイヴァーノヴナは以前の権力を悲哀をもって放棄せざるを得なくなった。オヌーフリツチは自分のほうから老婆のことを口に出すことは絶対にしなかったばかりか、妻と娘に老婆の話をするのを堅く禁じた。そういう情況にもかかわらず、イヴァーノヴナは叔母に接近することを決意した。あからさまに行動することはできかねたので、彼女は夫には内緒で叔母のところへ出かけて行き、甥の愚行に自分と娘はなにも関与していないことを信じさせよう、と心に決めた。

ついに、イヴァーノヴナの目論見にとって都合のよい機会が到来した。オヌーフリツチは、病氣になった郵便馬車駅の駅長の代行として、しばらく出張することになった。イヴァーノヴナは、夫を送り出すとき、やつとのこと内で内心の喜びを包み隠すことができた。いとしい夫を町の門の外へ送り出すやいなや、イヴァーノヴナは目から涙を拭うのもどかしく、マーシャの手を引いて家へ取って返した。

「マーシェンカ！ 急いで一番良い服に着替えなさい。一緒にお客さまになりに行くのよ」と母は娘に言った。

「誰のところへ、お母さん」とマーシャは驚いて尋ねた。

「立派な人たちのところへさ」——母は答えた——「急いで、急いで、マーシェンカ、時間がななんだよ。もう暮れかかっているのに、行先は遠いんだよ」

マーシャは壁に懸かっている安物の枠のついた鏡に近づき、髪を耳の後ろに撫でつけ、角製の櫛で長い濃い亜麻色の編み髪を止めた。それから赤い更紗のドレスを着て、絹のネッカチーフを首に巻いた。マーシャはもう二度ほど身体を回して鏡を見て、支度ができたことを母に告げた。

道を歩きながらイヴァーノフナは娘に行先がおばあさんの家であることを白状した。

「わたしたちがおばあさんの家に着くまでに暗くなるから、きつとおばあさんに会えるよ。いいかい、マーシャ、おばあさんの手にキスをして、久しくお会いしていなかったから淋しかった、と言うんだよ。おばあさんは初めのうちはご機嫌が悪いだろうけれど、母さんがなんとかだめてみせるからね。だって、うちのじいさんの頭が変になったのは、わたしたちのせいじゃないんだから」
そういう話をしているうちに、二人は老婆の家に着いた。閉ざされたよろいど鍔戸の透き間から灯りがきらめいた。

「いいかい、おばあさんの手にキスをするのを忘れるんじゃないよ」とイヴァーノフナは、戸口に近づいたとき、もう一度繰り返した。スルタンが大声で吠えだした。木戸があいて、老婆が手を差し伸べ、二人を部屋の中に招き入れた。老婆は二人を普通の夜の来訪者だと思った。

「お懐なつかしゅうございます、叔母さま！」とイヴァーノフナがまず口を切った。

「とつとと失せろ！」——老婆は相手が姪と知って、わめきだした——「なんの用があつてお前たちここに来たんだ？ わたしやお前たちなんか知らないし、知りたいとも思わないよ」

イヴァーノフナは話を切り出し、夫を悪者に仕立てて、赦しを乞いはじめたが、老婆は頑として聞

き入れなかった。「失せろ、と言っているのが分からないのか……」と叫び、「さもないと……」と手を振り上げた。

マーシャはびっくり仰天し、母親の言いつけを思い出して、大声で泣きながら老婆にすがりつき、その手に口づけした。

「おばあさま！ どうかお怒りにならないでください。久しぶりに会いできて、わたしとても嬉しいの」とマーシャは言った。

マーシャの涙はついに老婆の心を動かした。「泣くのはおよし」——老婆は言った——「わたしやね、お前のこと怒ってるんじゃないんだよ。お前が悪くないことぐらい分かっているよ。泣くんじやないよ、マーシェンカ！ お前はほんとうに大きくなったね、ほんとうに綺麗になったね」

老婆はマーシャの頬を撫でた。

「そばに来てお座りよ」——老婆はつづけて言った——「マルファ・イヴァーノヴナ、あんたもどうぞお座り。随分のご無沙汰だったけど、どうしてまた今ごろわたしのことを思い出してくれたのかね？」

イヴァーノヴナはこの質問に嬉しくなり、自分が夫をいろいろ説得してみたが、夫が聞く耳をもたなかったこと、夫が自分たちに叔母の家に出入りすることを禁じたこと、そのことで自分たちが悲しい思いをしたこと、そしてついにオヌーフリツチの留守を利用して叔母を表敬訪問する運びとなったことを縷々話しはじめた。